



厚生労働省は、6月4日、毎年恒例となっている「平成19年人口動態」を公表した。それによると、平成19年の出生数は108万9,745人で、前年の109万2,674人より2,929人減少した。

過去、出生数の最多は、第1次ベビーブーム期の昭和24年の269万6,628人であり、第2期の昭和48年にも209万1,983人と1年間に200万人を超える出生数であった。昭和50年以降は毎年減少し続け、平成4年以降は増加と減少を繰り返しながらゆるやかな減少傾向であった。平成13年からは5年連続で減

平成19年人口動態

情報広報部

榊 山 悠紀士

少し、平成18年は6年ぶりに増加したが、平成19年は再び減少した。合計特殊出生率は、1.34で前年の1.32を上回った。昭和40年代は、ほぼ2.1台で推移していたが、昭和50年に2.00を下回ってから低下傾向となり、前年は6年ぶりに上昇、平成19年も2年連続で上昇した。北海道は1.19で、昨年の1.18から0.01ポイント上昇した。

平成19年の死亡数は110万8,280人で前年の108万4,450人より2万3,830人増加した。死亡数は、昭和30年以降は70万人前

後で推移していたが、昭和50年代後半から増加傾向となり、平成2年以降は80万人台、平成7年以降はほぼ90万人台となり、平成15年から5年連続して100万人台となっている。

昭和50年代後半から75歳以上の高齢者の死亡が増加しており、平成19年では死亡数の約7割を占めている。出生数と死亡数の差である自然増加数は、マイナス1万8,535人であった。出生数が死亡数を下回ったのは、北海道をはじめ36道府県であり、出生数が死亡数を上回ったのは、埼玉県など11道府県となっている。

北海道は、平成19年

10月1日現在全人口は555万3,000人、19年の出生数は4万1,546人、死亡数は5万1,453人で自然増加は45人であった。因みに札幌市の人口は189万4,000人、出生数は1万4,498人、死亡数は1万4,043人、自然増加は45人であった。

平成19年の死亡数を死因順位別にみると、第1位は悪性新生物で33万6,290人、第2位は心疾患17万5,396人、第3位脳血管疾患12万6,940人となっている。第4位肺炎、第5位不慮の事故、第6位に自殺とつづき、自殺者は3万人を超え、3万7777人となっている。

悪性新生物は、平成19年の全死亡者に占める割合は30.3%と、全死亡者の3人に1人は悪性新生物で死亡したことになる。心疾患は、昭和60年に脳血管疾患にかわり第2位となり、その後上昇傾向を示している。平成19年の全死亡者に占める割合は15%となっている。

脳血管疾患は、昭和26年に結核にかわって第1位となったが、昭和45年をピークに低下しはじめ、昭和56年には第2位に、さらに昭和60年には第3位となり、その後も死亡数は低下を続けた。平成19年の全死亡者に占める割合は11.5%となっている。

悪性新生物について死亡数を臓器別にみると、男性の第1位「肺」は上昇傾向が著しく、平成5年に「胃」を上回って第1位となり、平成19年の死亡数は4万7,659人となっている。第2位は「胃」、第3位「大腸」、第4位「肝」と続いている。また女性の第1位「大腸」と第2位「肺」は上昇傾向が続いており、「大腸」は平成15年に「胃」を上回って第1位となり、平成19年の死亡数は1万9,003人となっている。

悪性新生物による死亡数は、昭和56年以降死因第1位を続けており、上昇傾向にある。悪性新生物による死亡数を減少させるため、禁煙をはじめとする種々の予防対策、検診による早期発見、質の高い対悪性新生物医療を受けることができる体制の整備が急がれている。